

C. S. ルイスと英国の時代背景

岡 田 理 香

C. S. Lewis and his historical background in Britain

OKADA Rika

はじめに

本稿は C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) と彼の生きた時代、主に戦間期と第二次世界大戦下の時代背景を考察することを目的とする。

20 世紀を代表する英国の作家であり大学教授であったルイスの生きた 20 世紀前半、英国ではヴィクトリア朝の終焉を迎え、世界大戦へと移行した時代であった。その中でグレアム・グリーン (Graham Greene, 1904-1991)、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh, 1903-1966) などの作家がキリスト教文学と呼ばれるジャンルを築いてきた。ルイスはオックスフォード大学における哲学講師からケンブリッジ大学での英文学教授として研究者としての道を歩みつつ、同時にキリスト教文学の流れの中にも参入するようになった。『ナルニア国年代記 (*The Chronicles of Narnia*)』(1950-1956) もそのうちの一つである。

本稿ではルイスの主要な活動期の中でもこの時代に焦点を絞り、出版状況、宗教状況、ルイスの個人的交友関係等の状況を確認する。第一節では、英国放送協会 (British Broadcasting Corporation: BBC) の戦時下における放送内容、また出版されたものの概要を把握した上で、当時の英国で作家らが抱いていた関心と議論を確認する。第二節では当時の宗教状況と作家たちがキリスト教へ回心した流れについて分析する。第三節では、ルイスを取り巻く状況と友人たちとの交流について述べていきたい。最後に、戦時下から生まれた文学作品に評価を下すことになるだろう。

1. 戦間期の BBC ラジオと出版

BBC 放送

英国では政府の提案により 1922 年に英国放送会社 BBC (British Broadcasting Company) が設立され、定期的なラジオ放送が開始された¹。当初は政府による放送の独占権が与えられる形態であったが、1927 年には公共放送となり、国王の特許状によって放送する公共放送英国放送協会 BBC (British Broadcasting Corporation) に改変された²。ラジオは英国中に普及し、1935 年には国民の 98% がラジオを持っていた³。1930 年代、英国のメディアの主流は新聞とラジオであったが、大戦などによる物資不足のため、より多くの国民がラジオを聞くようになった。BBC はニュース、トーク番組ならびに宗教番組などを放送していた。

BBC は毎日キリスト教番組を放送していた。その目的は教会に行くことができない聴衆の礼拝のため、またキリスト教布教活動としても放送されていた。日曜には礼拝が 9 時 30 分から放送され、10 時 45 分頃まで続けられた⁴。この放送にはやがてルイスと関わることになる BBC スタッフのエリック・フェンを含むあらゆる教派のスタッフが共同でプログラムを企画していた⁵。

エイサ・ブリッグズによると、宗教は困難な時代の助けとなるため、BBC の多くの宗教プログラムは議論を避け、戦時中に祈りや礼拝に専心できるプログラムの作成を心がけていたという⁶。そのような中でルイスも 1941 年から 1944 年にかけてラジオ放送講話を行なった。

第二次世界大戦が始まるとロンドン上空襲にさらされるようになった⁷。BBC の記者たちは戦地に赴き、戦況を中継で生放送した⁸。第二次世界大戦開戦の年には、放送プログラムのうち、ニュース番組の数が 75% 増え、逆に宗教番組は 62% 減少している⁹。

¹ Briggs, Asa, *The History of Broadcasting in the United Kingdom, vol.1. The Birth of Broadcasting*, Oxford, Oxford University Press, 1995, pp.5-7.

² Briggs, Asa, *The History of Broadcasting in the United Kingdom, vol.2. The Golden Age of Wireless*, Oxford, Oxford University Press, 1995, p. 3.

³ フェザー、ジョン、『イギリス出版史』(箕輪成男訳)、玉川大学出版部、1991年、[Feather, John, *A History of British Publishing*, London, Routledge] 334頁。

⁴ Scannell, Paddy and David Carlfiff, *A Social History of British Broadcasting, vol.1. 1922-1939, Serving the Nation*, Oxford, Basil. Blackwell, 1991, p.232.

⁵ 当時、BBC の宗教プログラムのスタッフには長老派、ローマ・カトリック、アングリカンなどいくつかの教派の人々が常時置かれ、企画に当たっていた。Briggs, Asa, *The History of Broadcasting in the United Kingdom, vol.3. The War of Words*, Oxford, Oxford University Press, 1995, pp.565-566.

⁶ *Ibid.*, pp.273, 561.

⁷ Harrison, Brian [ed.], *The History of the University of Oxford: the Twentieth Century*, Oxford, Oxford University Press, 2006, pp.174, 177-178.

⁸ この時の画像は以下に収録されている。

The World at War, vol.1-4, London, Thames Television, 1973.

⁹ Briggs, *op.cit.*, vol.3. p.87.

『動物農場 (*Animal Farm*)』(1945)の作者として知られるジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) は、1941年8月から1943年11月までBBCのトーク番組を担当している¹⁰。オーウェルは戦況ニュース解説原稿も手掛けており、それを見ると当時の状況が詳細に見えてくる。たとえば1942年9月19日の戦況ニュースでは以下のような記述がある。

四日前の9月15日が「英国の戦い」の二周年記念日として、英国と世界中で祝われました。1940年8月から10月にかけて、これはフランスの降伏の後でしたが、ドイツは空から英国を征服しようと総攻撃をかけ、数週間のうちに英国を征服できると豪語していました。彼らは8月と9月には日中に攻撃を行なって英国空軍を壊滅させようとしていました。これに失敗したことが明らかになると、夜間の市街地爆撃に変更し、ロンドンのイースト・エンドの労働者階級の居住区を狙って爆撃を行ない、市民の恐怖心をあおろうとしました。しかしながらこの全作戦は失敗し、ドイツ側はこの二か月の空での戦いで2千から3千機の飛行機を失い、数千名の貴重なパイロットが亡くなりました。9月15日が記念日として祝われるのは、イギリス空軍がドイツ軍機を185機以上撃墜したのがこの日であり、昼間爆撃によってイギリスの防空体制を破壊するというドイツ空軍の作戦の失敗がこの日明らかになったからです。¹¹

これにより、当時の戦況状況を一部知ることができるだろう。また、1942年1月20日のトーク番組のための原稿には以下のようなものがあった。

ロンドンの街を歩いておられますと、ソ連や極東での大戦闘のニュースが壁に貼られているのと並んで、フットボールやボクシングの試合のニュースなども貼られていることに気づくでしょう。¹²

このように始められた原稿は、戦時中の人々の娯楽について述べられている。戦前には金銭を浪費し、消費者に商品の購入をうながす広告が多かったことに対し、戦争開始と共に生活の簡素化が迫られているとオーウェルは訴えている。そしてこの日の文章はこう締めくくられている。

¹⁰ *Ibid.*, p.20.

¹¹ Orwell, George, *The War Commentaries*, West, W. J. [ed.], New York, Pantheon, 1985, p.153.

¹² Orwell, George, *The War Broadcasts*, West, W. J. [ed.], Duckworth, British Broadcasting Corporation, 1985, p.71.

必要に迫られて私たちは、簡素な楽しみなるものを再発見しつつあります。読書、散歩、園芸、水泳、ダンス、歌。これらは、あの浪費的であった戦前の時代には、私たちが忘れかけていた楽しみなのです。¹³

戦時中、質素な生活を強いられながらも、書物を手にするといった楽しみを行なっているという人々の生活を垣間見ることができる。

このように当時、作家がマスメディアを通して、自分の表現の場を得ていることが見られる。BBC 放送講話を行っていたルイスもその一人であった。著作家たちは第二次世界大戦下において上記のように自己表現しているが、出版の機会もあった。以下では出版について見ていきたい。

読書文化の変遷

1930年代の出版状況は過渡期を迎えていた。それは戦間期にあったことが理由であるだけでなく、人々が本を手にする形態が変化したということも要因として考えられる。

19世紀までの英国には貸本の店が数多く存在し、書籍を安く貸し出していた。中でも大手の貸本屋がミューディ (Mudie's Select Library) であった。1842年にロンドンで貸本屋を始め、W. H. スミスと並んで貸本業界で急成長を遂げた¹⁴。しかしそれもペーパーバックなどの登場により長くは続かなかった。安い再販本が簡単に入手できるようになってきたからである。ペンギンがペーパーバックを多数出版して読者は急速に貸本屋から遠ざかり、1937年にミューディは閉店した。貸本業界は終息を迎え、ミューディのライバルであった W. H. スミスは駅のプラットホームに支店を置くようにしていたため、貸本業から販売への移行に成功した。

ルイスの活動期である1940年代から1950年代に英国の人々によく読まれていた小説は、グレーム・グリーンとイーヴリン・ウォーであった。また、現代でも読み継がれている小説としては、イアン・フレミング (Ian Lancaster Fleming, 1908-1964) の007シリーズ (1953-1966)、先述のオーウェルの『1984』などがこの時期に誕生した¹⁶。ルイス自身も人気作家に名を連ね、1940年代には『天国と地獄の離婚』をはじめ小説やキリスト教書、英文学研究書を13冊出版している。1950年代には『ナルニア国年代記』、『顔を持つまで』と

¹³ *Ibid.*, p.73.

¹⁴ Griest, Guinevere L., *Mudie's Circulating Library and the Victorian Novel*, Newton Abbot, David & Charles, 1970, pp.1-3.

¹⁵ Sutherland, John, *Bestsellers: a Very Short Introduction*, Oxford, Oxford University Press, 2007, p.100. Griest, *op.cit.*, pp.213, 221, 223.

¹⁶ *Ibid.*, pp.96-100.

いった小説や自伝、英文学研究書など12冊を出版している¹⁷。

小説の他に、この時期の英国で「バイブル」と呼ばれていたものがあった。それがジェームズ・フレイザー（James George Frazer, 1854-1941）の『金枝篇（The Golden Bough）』（1890）である。『金枝篇』が誕生した背景には当時の神話研究の興隆があった。ロバート・アッカーマンによると19世紀後半まで英国では神話の起源と意味を解明しようとする研究が出てこなかったが、マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller, 1823-1900）の1856年のエッセイが神話研究の発端となった。ミュラーは神話の起源と意味を論じるエッセイで、古代のアーリア人は神話と呼ばれるものを通して絶対的なものへの憧れを表現しようとしていたと結論づけた。

ミュラーにより神話研究と議論が興隆し、中でも彼と議論を交わしたのがアンドリュー・ラング（Andrew Lang, 1844-1912）であった。ミュラーが神話は、言語的な過程の中で作り出されたものとするのに対しラングは、「アーリア人だけでない原初期のすべての人間に共通した物質的、社会的、それに心理的条件があって、神話とは人類がそうした条件に反応した証なのだと考える方が理屈に合う」としたという¹⁸。

人類学者、民族学者などが議論に参加する中、フレイザーはケンブリッジ大学特別研究員として、『ブリタニカ百科事典』の「タブー」の項目を解説することになっていた。この「タブー」に関する文献に当たった経験が『金枝篇』の出発点となったとアッカーマンは見なしている。というのは「タブー」に関する文献の多くは王の生活を取り巻く禁制の数々を扱うものであり、「呪われた祭司」が「森の王」であったという事実に刺激されたからだとアッカーマンは判断している¹⁹。

『金枝篇』は1889年、「原始宗教の歴史に関する研究」として原稿完成を間近に控えていた。出版可能かフレイザーがマクミランに打診したところ了承を得ることができ、翌年1890年に出版される。その冒頭はターナーの絵画「金枝」の説明から始まる。フレイザーは森の風景を述べ、それが悲劇の場であったと述べる。祭司職を志願する者は、現在の祭司を殺すことによってのみその職に就くことができる、そしてそこが殺人の場であったとしている。このような風習が他の場所にも存在していたこととその動機を見出し、その動機が広

¹⁷ 1940年代は『痛みの問題』、『悪魔の手紙』、『放送講演』、『失楽園』序説、『キリスト者の行ない』、『ベレンドラ』、『人間廃絶』、『人格を超えて』、『マラカンドラ』、『天国と地獄の離婚』、『奇跡論』、『アーサー王に関する未完の詩』、『転位』の13冊、1950年代は『ナルニア国年代記』全七巻と『キリスト教の精髄』、『十六世紀英文学』、『喜びの訪れ』、『顔を持つまで』、『詩編を考える』の12冊。

Evans, Jonathan, D., 'C. S. Lewis,' *Modern British Essayists*, Beum, Robert [ed.], *Dictionary of Literary Biography Vol.100*, Detroit, Gale Research, 1990, pp.160-161

McGovernm Eugene, 'C. S. Lewis,' *British Novelists 1930-1959*, Oldsey, Bernard [ed.], *Dictionary of Literary Biography Vol. 15*, Detroit, Gale Research, 1983, pp.298-299.

¹⁸ Ackerman, Robert, J. G. *Frazer: His Life and Work*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987, pp.76-77.

¹⁹ *Ibid.*, p.92.

く機能し制度を生み出していたことを示すことが『金枝篇』の目的だと書かれている²⁰。

アッカーマンは、この頃の英国の人々は植民地拡大において、自分たちが未開世界の人種よりも優位にあると信じていたと述べる。未開の段階にあるものを保存することなどせず、文明化することに使命があると考えられていた²¹。それに対して『金枝篇』は数多くの未開世界や古代社会で広く行なわれていた事例を価値づけながら挙げ、現代のヨーロッパにも見られる植物崇拜に基づくリズムなどが古代や原始世界にあったことを提示している。

『金枝篇』での重要な課題は「死にゆく神」であり、後半に登場するのがバルドル神話である。その物語はフレイザーにとると、オーディン神の息子バルドルは善と美の神であったという。ある朝バルドルは自分の死を予兆するような夢を見る。神々はバルドルを守ることにし、母フリッグ女神は火や水などあらゆるものに危害を加えないという誓いを立てさせる。バルドルは不死身になったと見なされ、神々はバルドルに矢を射ったり石を投げたりしてはバルドルが傷を負わないことを見て喜んだ。それを見た災いの主ロキはフリッグを訪ね、ヤドリギという植物だけは誓いを立てていないことを聞き出す。ロキはヤドリギを引き抜き、盲目の神ホズテルをけしかけてバルドルをヤドリギの矢で射るようにさせた。その矢は命中してバルドルは命を落とす。こういった物語である²²。

『金枝篇』でのフレイザーの結論は、バルドルの命はヤドリギに宿っていた、それゆえヤドリギでバルドルの命を奪うことができた、ということである。つまり祭司であり森の王である人物とは、金枝に命を宿す木であり、その木が人間の形をとったものということなのである。

『金枝篇』は1900年代の前半になっても人々に広く読まれていた。それは1922年に簡約版が出版されたことが要因として考えられる。その3年後1925年にはJ. R. R. トールキン(John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)がラングらと神話議論の場に参加していた。そのことから、『金枝篇』が神話議論の一端を担っていたことがうかがえる。ルイスも『奇跡論』の中で、死にゆく神や植物神、バルドルの物語を述べ、フレイザーについて言及している。

セバスチャン・ノールズは、当時のミューラーやフレイザーに関わる人々だけでなく、あらゆる作家や知識人たちが神話への関心を抱いていたとしている。この頃に神話研究が興隆した別の要因として、第二次世界大戦中、別世界の物語や死後の世界を描写した神話への関心が当時の状況に当てはまるとノールズは分析している²³。神話と呼ばれる物語の中でも特にダンテの『煉獄篇』に英国の作家らは関心を抱いていた。

²⁰ Frazer, James George, *The Golden Bough: a Study in Magic and Religion*, London, Papermac, 1987, p.2.

²¹ Ackerman, *op.cit.*, p.101.

²² Frazer, *op.cit.*, pp.607-608.

²³ Knowles, Sebastian, D. G., *A Purgatorial Flame: Seven British Writers in the Second World War*, Bristol, Bristol Press, 1990, p.26.

第二次世界大戦中ダンテの『煉獄篇』の影響が英文学界に押し寄せていた。以下の記述からわかるように、当時有名な一連の作家たちが煉獄に関心を持っていた。まず1939年にW. H. オーデン (Wystan Hugh Auden, 1907-1973) がダンテの『煉獄篇』を引用して自身の詩の中に「煉獄」を登場させた。続いてローレンス・ビニヨン (Laurence Binyon, 1869-1943) とジョン・シンクレアが同年に『煉獄篇』の英訳本を出版する。ドロシー・セイヤーズ (Dorothy Sayers, 1893-1957) は大戦中に『煉獄篇』の翻訳に時間を費やした。エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) は先述のビニヨンの翻訳の手助けをした²⁴。また、トールキンは「煉獄」をモチーフとした短編「ニグルの木 (Leaf by Niggle)」を執筆し、ルイスは「煉獄」を扱った『天国と地獄の離婚』を手掛けた²⁵。

以上のようにこの時期に『煉獄篇』が翻訳され、出版されるだけでなく、作家が独自の観点から「煉獄」を描くことも見受けられた。この「煉獄」の流行をノールズは「歴史的状況への反応」²⁶と分析している。つまり戦間期から戦時中に人々は死後の世界を意識した上で、「神話」から「煉獄」へと関心を寄せていた。ノールズの言葉を借りれば作家たちは「煉獄を希望の光」とし、「天国への道」と見なしたのである²⁷。英国の作家たちの間で起きた「神話」への関心、中でも「煉獄」への関心は現代の英文学に大きな貢献を果たした²⁸。神話研究の興隆、「煉獄」への関心などからインスピレーションを受けた作家たちが後に読み継がれる作品を残したのである。

2. 当時の宗教状況

ラジオ放送や出版状況に加えて、当時の英国の宗教状況、特にキリスト教も変化の時を迎えていた。

大戦中と戦間期の英国は不安定な状況が続き、失業や貧困が慢性化、キリスト教信仰を失い、教会を離れる者も増加した²⁹。オックスフォード大学では、ルイスが学部学生の頃までは義務であった学生の礼拝出席も義務ではなくなった³⁰。戦時中のオックスフォード大学は兵役に就く者たちの訓練の場となり、また避難所ともなった。兵士たちが訓練を終えて戦地に赴き、多くの聖職者は従軍牧師、司祭として参戦した。聖職者らが不在となった大学で

²⁴ *Ibid.*, pp.16-17.

²⁵ *Ibid.*, p.134.

²⁶ *Ibid.*, p.21.

²⁷ *Ibid.*, p.22.

²⁸ ノールズも神話や煉獄への関心が英文学に貢献を果たしたと見なしている。 *Ibid.*, p.34.

²⁹ Hylson-Smith, Kenneth, *High Churchmanship in the Church of England: from the Sixteenth Century to the Late Twentieth Century*, Edinburgh, T & T Clark, 1993, p.241. Hylson-Smith, Kenneth, *The Churches in England from Elizabeth I to Elizabeth II, vol.3. 1833-1998*, London, SCM Press, 1998, p.194.

³⁰ Harrison, *op.cit.*, pp.296-297.

は、ルイスも（後述するチャールズ・ウィリアムズも）説教壇に立った³¹。

その一方で1920年代から1930年代にかけて、英文学界ではキリスト教に回心する作家が増える。アリスター・マクグラスはこの状況を「宗教ルネサンス (Religious Renaissance)」と呼んでいる。キリスト教信仰を公言している英国の作家を追っていくと、1922年にはG. K. チェスタトン (Gilbert Keith Chesterton, 1874-1936)、1926年にはグレアム・グリーンが挙げられる。さらに1927年にはT. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965)、そして1930年にイーヴリン・ウォーがその信仰を公にしていた。中でもウォーの信仰告白はデイリー・エクスプレスの一ページを飾るほどのニュースとなり、「熱狂的に超近代性を信奉することで知られる作家」³²がどうして信者になったのかと話題になった。

ウォーは1920年代のオックスフォードでの日曜朝の様子を『回想のブライズヘッド (Brideshead Revisited)』(1945)で以下のように描いている。

その日はこの学期の最後の日曜日だった。……十一時近く、歩いている途中でそれまでの転調鳴鐘がやみ、単音の早打ちの音が町じゅうに鳴りひびいて、ミサの開始を知らせていた。その朝は、教会に行くもの以外、誰一人町には出ていないようだった。学生が卒業生、その妻たち、商人たち、誰もが急ぐわけでもなければ、ただぶらついているわけでもない、一目で教会へ行く英国人だとわかる足取りで歩いていて、手にはそれぞれに黒い子羊の革やセルロイドの表紙の、相反する幾つもの教派の祈祷書をどれか持ち、セント・バーナバス [アングロ・カトリック]、セント・コロンバ [ユナイテッド・リフォームド教会]、セント・アロイシアス [ローマ・カトリック教会]、セント・メリー [アングリカン教会]、ピュージー・ハウス [アングリカン教会]、ブラックフライヤーズ [ローマ・カトリック教会] など、修復されたノルマン様式や新ゴシック、あるいはヴェニスやアテネの様式を模倣したさまざまな教会の方へ、誰もが夏の日差しを浴びながら、それぞれの種族の神殿を目ざして歩いているのだった。[— 略 —] カーファックスの交差点では、真紅のガウンに金鎖の頸飾りをつけ職杖持ちを先頭に立てた市長と市会議員の行列が、誰の注目を惹くこともなく、市の教会での説教を聞きに行くのに出会った。セント・アルデイツでは、糊のきいたカラーに独特のキャップ姿の聖歌隊の少年たちがトム・ゲイトや大寺院 [アングリカン教会] へ向かう行列と、すれちがった³³。

(〔 〕内の教派の表示は本稿著者による。)

³¹ *Ibid.*, pp.6-8, 81, 180.

³² McGrath, Alistair E., *The Intellectual World of C. S. Lewis*, Chichester, Wiley & Sons, 2014, p.132.

³³ ウォー、イーヴリン、『回想のブライズヘッド』(小野寺健訳)、岩波書店、2009年 [Waugh, Evelyn, *Brideshead Revisited*, London, Chapman and Hall, 1945]、110-113頁。

ここに見られるように、それまでアングリカン教会一色だったオックスフォード大学では、入学にも在学にも信仰を表明することが義務でなくなった一方で多様性を見せ、キリスト教の教派も混在した。

当時キリスト教信仰を公にしたチェスタトンとグリーン、そしてウォーはローマ・カトリック信仰であった。ローマ・カトリックへ入った三人は英国においてあえて少数派になった者たちである。ウォーが回心したことについて野谷啓二は「結婚が破綻したことからくる傷心」、「絵画に造詣の深かった彼がカトリックの美的魅力に惹かれた」³⁴といったことを理由として挙げている。また、戦間期に「ヨーロッパの荒地ぶりに、彼は何か確固として強靱で、不易なものを信奉する必要があった」³⁵とも述べている。一方アングロ・カトリック教会への信仰を表明したエリオットは、アメリカからの移民であり、自らのアイデンティティを英国に置くという意味もあって、アングロ・カトリックに入ることを選択したということも考えられる³⁶。野谷も、エリオットがアメリカからの移住者であることを考慮すると、意識的に自らの立場を規定する必要があったと分析している³⁷。

以上のことから判断できることは、マクグラスのいう「宗教ルネサンス」の中に位置づけられる作家たちには、戦間期に生きていたという事情以外に共通点は見当たらない。マクグラスはこの時期にルイスがキリスト教に入ったことを「当時の社会にあった大きなパターンに沿うものである」³⁸と述べている。だがルイスの「回心」も、ちょうど同じ時期にあったというだけで「回心のパターン」に沿うとはいいいきれないだろう。むしろルイスはこうしたパターンにも枠組みにもとらわれないのではないか。ルイスの場合は、先に挙げた人物らのようにローマ・カトリックやアングロ・カトリックへの信仰を表明したのではなく、ルイスの表現でいえば「キリスト教信仰へと後戻り」したのである。彼の信仰は作品や著述を見る限りアングリカンの枠組みにも収まりきれない独特なものである。

いずれにしても戦間期と大戦の時代に英国では回心した作家は多く、ルイスもその中の一人だった。キリスト教の模索にあったという意味においてはマクグラスの「宗教ルネサンス」を肯定的に捉えておいてもいいだろう。

この頃のオックスフォードにおいて出版に加え知識人たちの会合においてもルイスは多大な影響を及ぼしていた³⁹。以下ではルイスの交流とその集まりについて確認したい。

³⁴ 野谷啓二、『イギリスのカトリック文芸復興』、南窓社、2006年、230頁。

³⁵ 同書、230頁。

³⁶ ノールズはウォーのようなローマ・カトリック作家にとっての煉獄はローマ・カトリックの教義の煉獄であるが、T. S. エリオットなどアングリカン作家にとっての煉獄はダンテの『煉獄篇』であると述べている。Knowles *op.cit.*, p.22.

³⁷ 野谷、前掲書、140頁。

³⁸ McGrath, *op.cit.*, p.133

³⁹ F. M. ターナーも当時の知識人にルイスが影響を及ぼしたと言及している。

Turner, F. M., 'Religion,' Harrison, Brian [ed.], *The History of the University of Oxford vol.8: the Twentieth Century*, Oxford, Oxford University Press, 2006, p.310.

3. ルイスの友人たち — インクリングズ

ルイスがトールキンと知り合ったのは1926年に英文学科の同僚の会合であった。トールキンは毎週ルイスの研究室を訪ねるようになり、著作についての情報交換などをするようになった。

当時のオックスフォードでは教員や学生が自由に不定期に集まって議論する場は数多くあった。そういったサークルの中の一つ「インクリングズ」は学生の始めた集まりで、トールキンもルイスもそこに招かれて参加した会であった。やがて学生が卒業してその会が立ち消えになるとルイスの研究室に教員仲間が集うようになり、毎木曜の夜に会合を持つようになった。その際ルイスの会が「インクリングズ」の名を引き継ぐことになったとハンフリー・カーペンターは述べている⁴⁰。

ルイスの研究室での集いは文学やキリスト教について議論する場となった⁴¹。インクリングズとは、「ほのめかし」「暗示」を意味するが、彼らにとっては、学者らの生活がインクにかかっているという意味もあったとマイケル・ホワイトは見ている⁴²。1930年代の中頃にはその中核は固まっていく。ルイスとトールキンの他、ルイスの兄ウォレン・ルイス (Warren Hamilton Lewis, 1895-1973)、オーエン・バーフィールド (Arthur Owen Barfield, 1898-1997)、ヒューゴ・ダイソン (Hugo Dyson; 本名 Henry Victor Dyson Dyson, 1896-1975) も含まれていた。インクリングズの歴史を通じて19名のメンバーが会員として挙げられるが、会合に参加するのはいつも数名であった⁴³。

1939年頃には火曜朝にもパブ、イーグル・アンド・チャイルドで集まるようになった。1940年代にはメンバーも増え、オックスフォード大学出版のチャールズ・ウィリアムズ (Charles Williams, 1886-1945) も参加するようになった。(後にトールキンは、このチャールズ・ウィリアムズの登場により、ルイスとの友情に亀裂が入ったと書簡を残している⁴⁴。) この会は

⁴⁰ だがマクグラスは「インクリングズという名前は、誰がいつ言い出したかは不明」としている。

McGrath, Alister E., *C. S. Lewis: A Life: Eccentric Genius, Reluctant Prophet*, Carol Stream, Tyndale House Publishers, 2013, p.176.

Carpenter, Humphrey, *The Inklings: C. S. Lewis, J. R. R. Tolkien, Charles Williams and Other Friends*, London, George Allen & Unwin, c1978, 2006, pp.56-57, 67.

⁴¹ Harrison, *op.cit.*, p.184.

⁴² ホワイト、マイケル著、『ナルニア国の父C. S. ルイス』(中村妙子訳)、岩波書店、2005年[White, Michael, *C. S. Lewis: The Boy Who Chronicled Narnia*, London, Little Brown, 2005], 195頁。

⁴³ McGrath, *C. S. Lewis*, p.179.

⁴⁴ 1963年11月か12月次男マイケル宛の書簡にこう残している。「多くの人が私を彼の親友の一人だと思い込んでいた。何ということだ。そのような関係は何十年も前に終わったことだ。私たちは、最初はチャールズ・ウィリアムズの突然の出現によって、次にルイスの結婚によって引き離された」。

Tolkien, J. R. R., *Letters of J.R.R. Tolkien*, Tolkien, Christopher [ed.], London, George Allen & Unwin, 1981, p.341.

Carpenter, *op.cit.*, p.252.

オックスフォードでは名の知られた会となり、1947年の探偵小説『白鳥の歌』でも登場人物たちが、そのパブに居合わせる場面が描かれている。

「おや、C. S. ルイスのお出ました」フェンが唐突に声をあげた。

「今日は火曜だな」

「そう、火曜だ」本部長は何本目かのマッチを擦って、パイプに火をつけようとした。⁴⁵

このように現地では、同じ曜日同じ時間にルイスがパブに現われることが知れ渡るほど、有名となっていた。

インクリングズには正式な入会規則も幹部も議題もなかった。ただ参加者はルイスやトールキンの知り合い、あるいはメンバーに紹介された人々に限られていた。議論だけでなく、自作の詩や小説を朗読する場ともなっており、この会でも「煉獄」の原稿が読まれていた。バーフィールドは、神話に基づく詩を執筆し、ルイスも『天国と地獄の離婚』を朗読している⁴⁶。さらに『ナルニア国年代記』のゲラ刷りがこの仲間たちに読まれたのもこの会であった。

第二次世界大戦の終わり頃、この会は曜日や場所にこだわらず頻繁にパブやバーで集まることが増えた⁴⁷。1945年にはチャールズ・ウィリアムズが亡くなり、新たに若いメンバーが加わる。一人はトールキンの三男クリストファー（Christopher John Reuel Tolkien, 1924-）であり、もう一人はルイスの教え子だったジョン・ウェイン（John Barrington Wain, 1925-1994）であった⁴⁸。

終戦を迎えるとアメリカ在住のルイスのファンが継続的に食料を送ってくれた。その小包の中には入手困難だったハムの塊が含まれており、ルイスはインクリングズの仲間が集まると小包からハムを切って給することが習慣となった。この「ハムの夕食」と呼ばれる集まりは1950年代まで続いたと見られる。

だが年が経つにつれインクリングズは徐々に集まるメンバーが減少していき、衰退に向かう。トールキンは新作を朗読することを止め、ルイスとも疎遠になりつつあった。1949年10月最後の木曜、続いて翌週も誰も来ず、その後しばらくして会は消滅した⁴⁹。

集まりは立ち消えになり、ルイスはケンブリッジの教授職を得て研究室を移動した。だが、この会の残したものは大きい。インクリングズで朗読されたもの、批評されたものは彼

⁴⁵ クリスピン、エドモンド、『白鳥の歌』（滝口達也訳）、国書刊行会、2000年〔Crispin, Edmund, *Swan Song*, London, Gollancz, 1947〕、81頁。

⁴⁶ Knowles, *op.cit.*, p.26.

⁴⁷ Carpenter, *op.cit.*, p.185.

⁴⁸ *Ibid.*, p.205.

⁴⁹ *Ibid.*, p.209.

らの執筆活動を励まし、そこから出た作品は今も残されている。『ホビット』、『指輪物語』、『ナルニア国年代記』もインクリングズのメンバーによって読まれ、批評され、完成へと後押しを受けた作品である。これらは20世紀を代表する英国の古典となった。ウェインは自伝でこう述べている。「オックスフォード大学が瀕死の状態にあった時代に、ルイスとその友人たちは活気を絶やさずにいた」⁵⁰。このことからインクリングズが英文学界に果たした貢献は大きいといえる。

おわりに

本稿では1930年代から1940年代の第一次世界大戦の終戦後から第二次世界大戦へと移行した英国の状況を見てきた。この時期にBBCラジオは戦況を伝え、出版界では貸本屋からペーパーバックへの販売と過渡期を迎えた。英文学界では「神話」への関心から「煉獄」への関心に移り「煉獄」に関する文学を生み出す状況が生まれた。作家らにはルネサンスと呼ばれるようなキリスト教への回心が起こり、ルイスもその一人と見なされた。そしてオックスフォード大学ではサークルが数多く存在する中で、ルイスとトールキンはインクリングズの会の中核となった。

戦間期、戦時下という特異な状況が生み出したものは、「煉獄」への関心、また、それにインスピレーションを受けて執筆する作品であった。戦争により生活上のあらゆることが制限されたものの、その一方でその背景から生み出されたものは後に残る優れた作品となった。ルイス、トールキンの作品の内実に迫ることは課題として残される。別稿で改めて論じたい。

(おかだ りか 本学非常勤講師)

⁵⁰ Wain, John, *Sprightly Running: Part of an Autobiography*, London, Macmillan, 1962, p.185.